空港で想うこと

北海道大学医師会
丸玉木材株式会社津別病院
日下　貴文

私は長らく単身赴任をしており、道内外を毎週移動している。必然的に空港で過ごす時間も長くなる。日本全国のほとんどの空港に行ったことがあるが、一番のお気に入りは現在も改築が続いている福岡空港であろうか。なんといってもアクセスの良さは断トツである。入場後もラーメンを食べたり、居酒屋でゴマサバをつまみにお酒を飲める。空港グルメも欠かせないが、那覇空港のソーキそば、新潟空港のへぎそば、伊丹空港のたこ焼きは毎回必ず食べる。

問題は、我が北海道の新千歳空港である。新千歳空港の使い勝手の悪さは、2020年１月６日の北海道新聞で、池澤夏樹氏も指摘している。

以前から言われているのだが、新千歳空港の滑走路は絶対に３本必要である。除雪のために滑走路１本での運用となり、毎年航空機の大遅延を繰り返している。上空で機長から「当機の着陸は何十番目です」と聞くと、こんなにもたくさんの飛行機が旋回しているのかとゾッとする。また、搭乗口の数が足りなすぎる。着陸しても駐機場に出発機がいるため、誘導路で待機することもある。

新千歳空港は商業区域が広く、肝心の空港機能を担う区域が貧弱である。チェックインカウンター前のスペースも狭いのだが、検査場を抜けて内部に入ると薄い（奥行きがない）と感じてしまう。搭乗客が並ぶと移動するのに邪魔となってしまう。他の空港を見ると、現在の３倍以上の内部スペースが普通である。さらに、最近の空港では降機客は２階へ、乗機客は３階からとなっていて、乗降客同士がクロスしないようになっている。新千歳空港では降りるのも乗るのも同じ階なので、到着客が来ると搭乗が中断して遅延の原因となっている。

夜間に飛行機が遅延して到着すると、新千歳空港ではJRやバスの運行は早々に終了していて移動手段がタクシーのみとなる。極寒の外で、何時間もタクシー待ちをしてもタクシーは来ない。私は早々に見切りをつけてターミナル内に入り、愛用している札幌のタクシー会社に連絡して１時間半かけて迎えに来てもらった。かなり前にタクシー乗り場で言葉を交わした人は、延々と続く列でまだ並んでいた。多くの乗客が空港の床や椅子で一夜を過ごさなければならないのは、北海道の恥である。

北海道の玄関口がこのようなことでは、北海道が観光立国とはなりえない。構造的な問題なので、改築では改善しないであろう。それでもあと20年以内には、快適な空港となるように何とか解決してほしいものである。

雑草と人間

札幌市医師会
手稲いなづみ病院
成田　欣史

気温が上がり雪がなくなって、春らしくなってきた。すがすがしい季節ではあるが、我が家では毎年この時期から異変が始まる。隣家との間にかわいらしい芽を出したと思ったら、２～３週間もすると青々と生い茂る、いわゆる雑草の登場である。

雑草についてネットで調べてみると、かかわる人の立場によって雑草に含まれる植物が異なるとの解説があった。たしかに、道路わきの植物は散歩者にとっては目を楽しませる草花だが、道路管理者にとっては無用の雑草となる。農家にとっては植えた作物の横に芽吹くものは雑草である。我が家の場合、ほんの数株植える野菜以外を雑草と呼ぶ。少しずつ除去するのだが、イネ科のとげとげした草を抜くと、しばらくしてシャープペンの芯くらい細い茎で葉が地面すれすれについているものや、触ると種を飛ばして目つぶしをしかけてくる不届き者、泡立つような花が見ただけで膨疹が出そうな草などが次々と現れ、一気に増えるのである。

しかし最近は嫌になって草むしりをさぼると、各種類がそろい踏みするが急には増えない。バランスが取れるのであろうか。動物や昆虫などは、ある種類が一時的に増えても餌がなくなって数が減り、結局もとの生態系が維持されるようである。そういえば、生物は複数の種類でバランスがとれるようになっていると授業で習ったのを思い出した。

身の回りでは、病院にいろんな職員がいると、さまざまな性格の患者について理解したり対応しやすくなる。また複数の視点があることでリスクに気がつくことができ、安全に運営できるメリットもあるだろう。我々の社会や組織も、単一の属性ばかりではバランスがとれないのではないか。ヒトも生物のうちの一つである。多様であることには大きな価値があると考えながら、日々の草むしりを怠ける口実を作っている。